

新たな国の登録有形文化財へ ―東北大学・東北学院大学内建造物

7月16日、東北大学片平キャンパス内にある旧東北帝国大学理学部生物学教室をはじめとする8件および東北学院大学正門1件の計9件について、国の登録有形文化財として登録するよう、文部科学省文化審議会が文部科学大臣に答申しました。いずれも国土の歴史の景観に寄与しているもの、造形の規範となっているものといった基準を満たしていると、文化審議会が評価されました。

明治から昭和初期に建築されたこれらの建造物は、保存状態も良く、近代建築のデザインの変遷を伝える貴重なものです。東北大学

片平キャンパス内に建つ、旧仙台高等工業学校建築学科棟もその一つ。外観は、連続窓を配置し、壁面を張り出すことで変化をつける。昭和初期としては前衛的なデザインが取り入れられています。また、当時流行した、細かい溝があるスクラッチタイルを外壁に使用して壁面の光の反射を抑え、正面には仙台高等工業学校の校章を付すなど、教育機関としての重厚さも感じさせる造りとなっています。今回の答申を受けて、市内における国の登録有形文化財は62件となる予定です。登録文化財は、保存を図りながら、観光や文化の拠点として活用することが可能です。今回、答申された大学内の建造物も、教室や研究室として現在も使用されています。地域の歴史を伝える資産として親しまれながら、次世代に引き継がれていくことが期待されます。



▲「旧仙台高等工業学校建築学科棟」。建物中央部アーチと、格式を感じさせる外観が特徴的

り昨年は中止となりましたが、今年には感染防止策を講じ、規模を縮小して行われました。

当日は、動物園の飼育員や農家、コピーライターなど13の仕事に関する講座が設けられ、その魅力を自らの体験を交えて説明。児童たちは熱心に耳を傾け、質問コーナーでは、どうしたらその職業に就けるのかなど、積極的に質問していました。講座によっては、児童が仕事を実際に体験する時間も設けられ、アナウンサーの仕事の講座では、講師であるプロのアナウンサーから教わったアクセントや姿勢に注意しながら、真剣な表情で原稿を読み上げる姿が見られました。

参加した児童たちが、大人になって働く自分のイメージを膨らませるきっかけとなる、有意義な夏休みの時間となりました。

市政トピックス 将来の夢を追いかけ る―楽学(が)くがく プロジェクト開催

7月29日に、市内の小学5・6年生を対象とした「楽学プロジェクト」が宮城野区中央市民センターで開催されました。このプロジェクトは、自分が興味を持つ職業のプロから仕事の話を聞き、将来の職業について考える機会にしてもらうと企画されたもの。新型コロナウイルス感染症の影響によ



▲進んで手を挙げるなど、講話を楽しみながらも真剣に参加していました

第36代市長に

郡 和子氏



仙台市長選挙は、8月1日に投票が行われました。当日有権者数は88万8,188人、投票者数は25万8,377人。投票率は29.09%でした。即日開票の結果、現職の郡和子氏が、20万9,310票を獲得し、当選しました。

第36代市長の任期は、令和3年8月22日から令和7年8月21日までの4年間です。

市政トピックス

次世代の女性農業者の活躍を目指して

若手女性農業者を対象とした加工実習「フルーツマスタードで仙台の野菜を楽しむ」が、8月3日・4日の2日間にわたって開催されました。これは、次世代を担う女性農業者の育成と活躍を目指す「次世代アグリヒロイン活躍支援事業」の取り組みの一つです。

実習では、紫山のごはん会主宰・佐藤千夏氏を講師として、からし菜の種子に、ブルーベリーなどのジャムを合わせたオリジナルのフルーツマスタードを作りました。和やかな雰囲気の中で調理は進み、最後に仙台産の野菜を盛り付けたランチプレートに、マスタードを添えて実食。参加者たちは、フルーツとマスタードの意外な組み合わせから生まれる優しい味わいを、笑顔で楽しみました。



▲それぞれ好きなフルーツを選び、オリジナルのマスタードを作る参加者



▲フルーツで辛みがマイルドになったマスタードを、料理に合わせた組み合わせました

市政トピックス

ご遺族のための「おくやみハンドブック」ができました

実習後、参加者からは「自分で作っている野菜でも試してみたい」などの感想が聞かれ、今後の農業経営のヒントにしようと意欲を見せていました。今後、女性農業者の掘り起こしやステップアップを目指し、視察研修などを実施していきます。

市では、家族を亡くした際の必要な手続きをまとめた「おくやみハンドブック」を作成しました。ご遺族の負担を軽減するため、住民票や年金、保険など多岐にわたる手続きを、詳細に分かりやすく冊子にまとめたものです。

ハンドブックでは、冒頭のチェックリストで亡くなられた方に当てはまる項目をチェックすることにより必要な手続きが分かり、受付窓口や持参する物等も確認することができま

す。ハンドブックは、死亡届が提出された際に区役所戸籍住民課・総合支所税務住民課の窓口でお渡しするほか、市ホームページでもご覧いただけます。



3.11 震災文庫

東日本大震災を語り継ぐための市民図書館に設けた「3.11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本を「紹介します」。

「大津波と里浜の自然誌」



岡浩平・平吹喜彦 / 編 蕃山房 刊

東日本大震災以前、仙台市の東縁は白砂青松の砂浜海岸によって縁取られていました。河口には潟湖と干潟が、奥行き400メートルに達する砂丘には集落もあって、貞山堀や湿地を挟んで、田園が覆う広大な平野へ連なっていました。ふるさとの海辺は、「海と陸と川が交わる境界域(エコトーン)」として、多様な生物、ここにしかない生態系、自然の恵みと災いに順応した暮らし・文化にあふれていたのです。

被災地の粘り強い復興活動には心打たれるばかりですが、砂浜海岸エコトーンの生物・生態系もまた、科学者の予測を超える巧妙さと素早さで、自ら再生してきました。「大津波と里浜の自然誌」ではその実態と復興・防災への活用を、大地震・

「海辺のふるさと―仙台市東部沿岸地域の歴史と記憶」



せんだい3.11メモリアル交流館 / 企画・編集 菅野正道 / 執筆

大津波による破壊の不均一さ、生物種それぞれに備わった適応術、住民が培ってきた土地勘・生活知・絆に着目して、22名の専門家が紹介しています。

また、「海辺のふるさと―仙台市東部沿岸地域の歴史と記憶」では、里浜の変遷が、江戸時代以降の先人の営みに焦点を当てながらビジュアルで提示されています。絵図・地形図・航空写真の対比と、丁寧な地域調査に基づく石碑や神社、日常生活の描写が、いとおいふるさとへの再会を可能にしてくれま

す。困難や災害を和らげ、地域の持続を可能にする方策(レジリエンス)は、再生途上の海辺にいくつも隠れています。みんなが探求し、気付きを分かちあえたら、と思いました。

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585